昭和63年
第20回大会

少年たちの安全への思い、届く!

小・中学生を対象に作文コンクールを実施。

- ●題材は「トラックと私たちの生活」「トラック運転手さんへのお願い」「引越しとトラック」など。
- ●コンテストでは、史上初の最高得点者2名が出た記念すべき大会となりました。
- ●各部門の優勝選手に、イスラエル交通安全協会からオリーブの盾が贈られました。

内閣総理大臣賞受賞／藤原卓福選手

安部龍矢君　鎌塚英明君　山田仁志君

募集作文最優秀作品

小学校低学年の部　運輸大臣賞・全日本トラック協会会長賞受賞
大分県東国東郡安岐町立西安岐小学校一年　安部　龍矢

お父さんはトラックのうんてん手

ぼくのお父さんは、トラックのうんてん手です。まいあさぼくがねむっているときにうちをでてタがた六じ半ごろにかえってきます。だからぼくは、あさお父さんにあえないし、ごはんも一しょにたべられません。そんなお父さんのおしごとってどんなのかな。ぼくは、お父さんにむりをいってなっやすみに一どだけおしごとについていってもらいました。

八月二十一日よる一じ、お母さんにおこされて、おべんとうと、コーヒーとジュースともうふをもって、お父さんの十トン車のトラックにのりました。すると、お父さんが、「きょうのしごとは、きたきゅうしゅうの田川からセメントをつんで大分のゆふいんまでもっていくしごとだよ。」とぼくにいいました。

はじめは、すこしねむったけど「コーッビュー!!」とかぜをまきおこしてすれちがう大がたトラックに、目がさめてしまいました。

まえからくる車のライトが、トラの目のようにひかってむかってきます。うんてんだいのお父さんは、ハンドルをしっかりにぎってこわいかおをして、トラの目をにらみつけていました。すれちがう車は、ほとんどがトラックです。トレーラー、ボトル車、ホロ車、れいとう車、小がたトラック、大がたトラックみんなみんな大きなにもつを一ぱいつんではしっています。ぼくはふしぎにおもって、「どうして、よるにトラックばかりはしりよるの。」ときいたら、お父さんは、「おさかなや、やさいのいちばはあさがはやいし、かいしゃも八じにはしごとをはじめるので、それまでに、にもつをとどけなければならないから、よなかにトラックではこぶんだよ。」とおしえてくれました。

ぼくは、みんながねむっているあいだに、お父さんや、トラックのおじさんたちが、たくさんのにもつをはこんでいるのを、はじめてしって、びっくりしました。

「お父さんのしごってたいへんだなあ。よるはしるので、ねむくないの。」ときいたら、「だいじょうぶだよ。じかんがあるときに、ちゃんとねてるから。それに、むせんきでいろんな人とはなしをするから、つかれがふっとぶんだよ。」とわらっていました。

田・川でトラック一ぱいセメントをつんで、かえりの車はくるしそうでした。ゆ・ふ・いんでセメントをおろしたとき、ぼくのからだもホッとしてかるくなりました。お母さんに、「いま、にもつをおろしたので、これからかえるから。」とでんわをしたら、お母さんが、「ごくろうさま。きをつけてかえってね。すいかとビールがひえてますよ。」といいました。ぼくは、「よしこさんやも」ぱいやるか。」と、とてもにこにこがおでした。

そのときぼくは、まいにちがんばって、しごとをしてかえるお父さんに、おふろをわかしてまっていよう、とおもいました。

小学校高学年の部　運輸大臣賞・全日本トラック協会会長賞受賞
北海道名寄市立名寄南小学校四年　鎌塚　英明

トラックと生活

ぼくの家は、運送業です。おじいちゃんが社長、お父さんがせんむ、お母さんが事むをしています。だから、ぼくや弟のめんどうは、おばあちゃんとお母さんとが見てくれます。

夏休みに入ると、お母さんと弟とぼくとで、トラックの駐車場のゴミ拾いをします。弟が「どうして、こんな事をするの。」と聞くと、「タイヤにガラスの破片がささるとパンクするんだよ。」と教えてくれました。お母さんは、事むの仕事の合い間に駐車場のまわりに、パンジーやマリーゴールドの花を植えたり、トラックのイスカバーや座ぶとんを新しく作ったりして、運転手さん達が気持ちよく運転出来る様にふうしています。ぼくも、お母さんのこの気づかいが、きっと事故を防いでくれていると思っています。

ぼくは小さい時からトラックのエンジンの音を聞いて育ちました。バックしながら車庫の中に入れる時に、助手の人の「オーライ!」「オーライ!」の合図は大きい声でおどろきました。なぜそんなに大きな声を出すのかお父さんにたずねると「運転手さんは、合図の声をたよりに安全な場所へ移動するんだよ。」と教えてくれました。事故やケガを防ぐために、細かい所に気を使っている事がわかりました。ぼくは、その時から「オーライ!」の合図が聞こえてくると、心の中で「がんばってね」ということにしています。

日曜日の朝、お父さんに「宿題が終ったらどこかへ行くか。」とさそわれました。ぼくは、うれしくて急いで宿題を終わらせてトラックに乗りました。トラックは、乗用車にくらべると見はらしが良く気持ちがいいので大好きです。トラックの中に入ると、ぼく達くらいの男の子が急に飛び出して来ました。「あぶない!」と思わず声が出ました。ぼくは、上手に男の子をよけて走り続けました。お父さんの顔を見るといつもと同じ顔をして「あぶないなあ。英明も自転車に乗る時はルールをきちんと守るんだよ。」と言いました。「うん」とぼくは答えたけど、ぼくもさっきの男の子と同じ事をしているので、何かうそをついてしまったような気がして、「これからは、絶対こんな事をしてはいけない。」と反省をしました。

今まで、テレビのニュースなどを見て「どうして運転手さん達はもっと気をつけてくれないのだろう。」と思っていました。けれど、お父さんの横に乗って見て初めて気づいたのです。運転する人達だけが注意するのではなく、自転車に乗るぼく達も気をつけなければいけないということが。

それから、今年は学校のクラブでサイクリングクラブに入ったので、このクラブで交通ルールを勉強し、正しい自転車の乗り方を覚えて、お父さんや多くの運転手さん達がもっと安心して運転できるようになれば、交通事故もなくなると思いました。そして、ぼくもお父さんをおいぬかせるような、りっぱな運転手になりたいと思います。

中学生の部　運輸大臣賞・全日本トラック協会会長賞受賞
北海道旭川市立光陽中学校二年　山田　仁志

海辺の出来事

わが家の前の国道を、今日もつぎつぎと通りすぎる大きな貨物トラックを見送る時、僕はふと二年前の海辺のキャンプのことを思い出すのです。

暑い夏の一日が終わり、夕くれの涼しい潮風に吹かれて父母や姉達といっしょに夕食の米をといだり、テントの中の整理などをしていた時、キャンプ場の近くの国道に大きな貨物トラックがとまり、男の人が二人降りてきました。

その二人が僕達のそばを通りかかった時、父が「たいそうな荷物ですね。どこまで運ぶのですか。」と尋ねると、背の高い方の人が、「四国の愛媛です。養殖ハマチのえさにするイワシを運ぶ途中です。帰りには四国からハマチを運んでくることもあるんですよ。潮風に吹かれて焼イカでも食べ、一息入れたらまた出かけます。」とニコニコしながら砂浜の売店の方へ足を向けました。

母は、「ハマチの刺身はおじいちゃんの大好物ね。そういえば、昔は北海道にいてハマチをロにする機会などめったになかったのに今はスーパーでいつでも買えるようになったものね。」と感慨深げにつぶやきました。

貨物トラックの輸送網が全国に張りめぐらされ、北海道で取れすぎて困っているイワシは、それを待ち望んでいる四国トラックによって運ばれ、四国で養殖したハマチは北海道まで運ばれ、人々を喜ばせてくれます。

又、農家でも取れすぎた野菜を畑で腐らせたり、安値に苦しむことが少なくなったそうです。それは、その野菜を欲しがっている遠くの町や村へこの貨物トラックで鮮度を落すことなく運ぶことができるからです。

わが家でも、よく宅配便を利用して千葉に住んでいる伯母に「トウキビ」や「アスパラガス」を送ります。いとこ達はとても喜んで、電話ロでトウキビを食べる音をさせてから、「どうもありがとう。」と声をはずませました。

このように、遠くの人々に手軽に新鮮なものを新鮮なままの状態で送り届けることができる陰には、トラックの運転台のわずかなスペースで仮眠をとり、夜も昼もひたすら走り続ける人がいるのです。郷里に妻や子を残し、見知らぬ遠い町から町へ、ひたすらトラックを運転し続ける人々がいるからなのです。

日本全体を人間の身体に例えるなら、トラック輸送網はまさに身体のすみずみまで休みなく養分を運び続ける血管です。

僕達の今日の豊かな生活は多くの人々の努力によってささえられていることを忘れてはならないと思います。

焼きイカを食べ終えた運転手さん達は僕達に手を振り、車の方へもどって行きました。

浜辺にちらばるあちこちのテントには灯がともり始め、貨物トラックの黒い影が国道のかなたに小さく遠ざかり、やがて山すその暮色の中に消えていくのでした。